第 31 回いたばし国際絵本翻訳大賞 英語部門 講評

今回の絵本 LALA'S WORDS は、"rough"な女の子ララが主人公。外遊びが大好きなララは、いつも泥だらけで服もすぐやぶいてしまい、片付けも苦手で、お母さんに叱られています。子どもとして、あるいは、親として、心当たりがある方々がいるかも……！？　白黒で描かれた風景の中で、一人黄色を使って描かれるララのはじけるようなエネルギーと、空き地から広がってむくむくと街を覆う植物の緑が印象的な絵本です。英語圏の「green fingers＝緑の指を持っている」という慣用句が示すとおり、植物を育てるのが得意な人（子ども）というのは、伝統的なテーマでもあります。

舞台となっているララの住む街も、生き生きと描かれます。いつもラジオを聴いている Piatek さんはおそらくポーランド系でしょう。ポーランド語での発音に基づくと「ピョンテク」が近い発音になるでしょうが、英語的に発音すると、またべつの表記になりそうです。最初に大きく育った植物を見つけた Héctor は、スペイン語の発音だと「エクトル」になります。でも、Piatek さんの場合と同じく、英語の発音になっている可能性もありますし、人名の発音は、その人がどのように発音することを好むかによって変わることもありますので、今回は採点の対象にしていません。実際に出版する際は、作者にたずねるのが一番でしょう。

また、ララが部屋の窓から手を振った Rosie は買い物袋を提げていますが、その一文は「Rosie passed by with their groceries」となっています。Rosie の所有格は、「her」や「his」でなく「their」。つまり、Rosie は、自分を〈男性〉や〈女性〉という性別に当てはまらないと考えているのではないでしょうか。今回はそれを日本語訳に（自然に）反映させるのは無理だと思いますが、気づいてほしい部分でもあります。

肌の色はもちろん、いろいろな人々が暮らすララの街は、今、作者が暮らしているというブルックリンかもしれませんね。文章にはない、描きこまれた街の風景も、隅々までよく見て、訳してください。絵本の翻訳では、「絵を見る」ことがとても大切です。

では、毎回ここでご紹介していますが、具体的な審査のポイントをお伝えします。基本的なことですが、だからこそ、とても重要です。

まず一次審査では、全般的なこととして、

・読みやすい文章になっているか（ちゃんと日本語になっているか）
・絵本にふさわしい言葉が使用されているか（対象年齢が意識されているか）
・誤訳はないか
・原文にない勝手な補足（不必要な付け足し）がされていないか
・訳しもれはないか（「said ○○」の省略など、意図的な工夫は OK）
・誤った日本語が使用されていないか

・誤字脱字はないか（多少のケアレスミスは OK）
・訳文が絵に合っているか
・創作になっていないか
・応募要項にそっているか
・台詞の口調がその登場人物にあっているか。また、作品内で統一されているか（途中でキャラが変わっていないか）
・不必要・不自然と思われる極端な幼児語が使われていないか
・声に出して読んだときに不自然になっていないか（読み聞かせできるか）

をチェックしました。

　次に各ページのチェックポイントをいくつか、ご紹介します。

P.03　Hot, hot, hot.
原文のようにリズミカルに訳せればベター。ただし、不自然な日本語にならないよう注意。

〃　　Everyone was still.
still を「じっと動かない」と訳すと、散歩したり、音楽を聞いたり、洗濯物を干したりしている人々の絵と合わなくなるので、訳を工夫する。みんなは still しているけどララは still していない、とはどういうことかを考える。

P.04　Lala was not.
「not」のあとに「still」が省略されていることを読み取れているか。

P.05　Lala jumped and ran, tripped and fell.
ここは悩まれた方が多かったと思います。採点時は、文章に合わせて訳しても、（原文から大きく離れない程度に）絵に合わせて訳しても OK としました。原文のようにリズミカルな訳文になっていればベターです。

P.07　”What child is as rough as you?"
「rough」を「らんぼう」「がさつ」などと訳すと、ララのキャラクターに合わないので注意。

P.08　Lala didn't know. But she did know...
ララが知らないことは何か、知っていることは何かをちゃんと理解できているか。ここは意外に、誤訳が多かったです。

P.08　Past Mr. Piatek with his radio.
ラジオを聞いている Mr. Piatek の前をララが通り過ぎていることが理解できているか。また、Mr. Piatek の家は P.24 と思われるため、ここを「家」としないように注意。ここも絵を見ている方と、そうでない方の訳が分かれました。

P.09　a patch of dirt and concrete,
土とコンクリートの（小区画の）土地、などと直訳すると硬くて不自然な日本語になるので、表現を工夫する。また、水をあげる前の「dirt」は泥ではなく土と思われるので注意。

〃　A place of Lala's own.
必ずしも直訳でなくて OK。ララだけが行っている場所であることが自然な表現で伝わるように。

P.11　"Hello, hello, friends,"
「friends」を必ずしも「ともだち」と訳す必要はないが、ララが植物を友だちだと思っていること、植物に親しみや愛情を感じていることが伝わるように工夫する。

P.14　pot
この「pot」が前のページのキッチンから持ち出したもの（鍋）であることが理解できているか。ここも、絵をよく見ているかが問われますよね。

P.20　"You are so very special,"
P.38 のお母さんのセリフと同じ。完全に同じに訳さなくてもいいが、読み手につながりがわかるよう訳せればベター。こうした〈ストーリーの流れ〉を全体的にみられているかどうかも、文芸の翻訳ではとても大切です。

〃　sighed Lala.
「sighed」を「ためいきをついた」と直訳すると、マイナスのイメージになりそうなので注意。植物に対して「You are so very special」と伝えているときの「sigh」とは何かを考える。

P.22　Who would visit her little friends?
「（自分以外の）だれが little friends に会いにいってくれるの？」（だれもいってくれない）というニュアンスが読み取れているか。読み取れていれば、別の表現でも OK。

P.27　It was cool, cool, cool
冒頭の「Hot, hot, hot」と一緒で、原文のようにリズミカルに訳せればベター。ただし、不自然な日本語にならないよう注意。また、日陰になっただけであって、寒くなったわけでは

ないので、「cool」を「つめたい」「ひんやり」などと大げさに訳さないようにする。

P.27　shade
ここで「木陰」と訳してしまうとネタバレになるので注意。

P.31　They had been listening
植物が「listening」していたのは「Lala's words」であることを理解できているか。過去完了であることにも注意。

P.38　"... you are so very special."
P.20 でララが植物にかけていた言葉と同じ。不自然にならないようにつながりを持たせられればベター。

P.40　"I love you, my amazing girl.
「I love you」もララが植物にかけていた言葉。つながりを持たせられればベター。「my amazing girl」という呼びかけは、直訳すると不自然になりがちなので注意。こうしたセリフや「Oh」といった感嘆詞は意外に訳しにくいと思います。言葉を発した人物の気持ちになって考えるのが大切だと思います。

一次審査では、プロの翻訳者の目線から、訳文を表面的に判断せず、「なぜその文にしたか」ということまで考えて審査しています。
結果、849 応募作品中、30 作品が最終選考に進みました。

最終選考でも、基本は一次審査と同じ点を大切にして審査しています。
最優秀翻訳大賞の『ララのまほうのことば』は、誤訳がないことはもちろん、言葉のリズムがすばらしかったです。絵本は、読み聞かせをすることも多く、音読したときのリズムはとても重要です。出だしは「あつい　あつい　ああ　あつい」。ララの植物が街を覆ったときは、「すずしい　すずしい　あら　すずしい」。「Hot, hot, hot.」「It was cool, cool, cool」とそれぞれとても平易でシンプルな原文の訳として、ぴったりだと思います。「You are so very special」は「とびきり　とくべつ　すてきなこ」。「と」で頭韻が踏まれていて、ララの気持ちも伝わりますよね。
お母さんの「What child is as rough as you?」は「こんな　おてんば　ほかに　いる？」。お母さんがララに手を焼いている感じが伝わってきますし、同時に「おてんば」という言葉に愛情も感じられて、母が娘を形容する言葉にふさわしいと感じました。最後のお母さんのせりふ「だいすきよ。すてきな　おてんばさん。さあ、そとで　あそんでらっしゃい」にも生かされていて、訳者がストーリーをきちんと把握し、1 ページ 1 ページではなく 1 冊という単位で作品を訳しているのが伝わってきました。

優秀賞の『ララのだいじなたからもの』は英語を丁寧かつ正確に自然な日本語に写し取っていることが印象的でした。「こんなに　やんちゃなこって　ほかにいるかしら」「しましまもようが　すてきね」「ララ、いいかげんにして！　どろや　くさまみれで　わけのわからないことを　ぶつぶつ　いうのは　もう　おしまい！」「だいすきよ。あなたは　びっくりするほど　すてきなこなのね」などのセリフを原文と比べてみると、英語の文章そのままなのに、日本語として自然に読めることがよくわかります。「sighed Lala」も「ためいきをついた」と直訳すると、ストーリーと合わなくなってしまいそうなのに、「『あなたたちは　だいじな　だいじな　たからものよ』ララは　おもわず　ためいきを　つきました」と「おもわず」を入れることで、自然に読ませています。そうした工夫が随所に見られました。

特別賞の『ララのことば』(応募番号 E-0386)は、子ども読者を意識した訳が魅力的でした。「おひさまは　おもそうに　そらに　しがみついています」「みんなが　わさわさ　はっぱを　ふるわせたり　ゆらゆら　ゆれたりしたのは」「ララは　えんえん　なきました」「ララのほかに、　だれが　はっぱちゃんたちのところへ　いってくれると　いうのでしょう？」「よるになって　キラキラ　ひかる　めのような　つきが　のぼりました」オノマトペの使い方が上手です。ほんの少しだけ、日本語として不自然な訳があったので（「ピアテックおじさんを　とおりこします」)、そうした箇所の精度を高めてみてください。

同じく特別賞の『ララのやさしいことば』は、ストーリーがよく伝わるように訳されていました。「run to her garden」を「じぶんの　おにわへ　まっしぐら」と訳しているところ。「でも　しょくぶつが　ゆらゆら　そよぐのは、ララの　やさしいことばの　おかげです」と「おかげです」という言葉を使っているところ。「つぎのあさ　ひざしは　それほど　つよく　ありませんでした。とっても　大きな　かげが　のび、すずしい　かぜが　ふいています」と、状況が伝わるように説明しているところ。訳者が物語の中でなにが起こっているのかをよく理解した上作成した訳文だとわかります。贅沢を言えば、原文のリズムをもう少し取り入れられたらよかったかもしれません。

そして特別賞もう一作品の『ララのことば』(応募番号 E-0717)は、文体が確立されていて、読んでいて楽しいところに惹かれました。「おひさまは　そらに　どーんとあぐらをかいている」「かどを　ぐるっとまがって　まっすぐ　ずんずん」「おかあさんは　ついに　ばくはつした」「バスが　ふうふう　いいながら」。1 冊を通して文体に揺るぎがないので、安定感を感じました。「waved politely」(ひかえめに　てをふったり）や「Lala felt warm inside」(ララは　おかあさんの　あたたかさを　かんじた)の解釈が少し原文とずれていたかもしれません。

今回は、そもそも誤訳が少なく、審査はいつにもまして悩みました。裏を返せば、とてもいい訳文なのに、数少ない誤訳のせいで賞を逃してしまったものもあります。基本中の基本、誤訳がないかはよく確認してください。

あとは毎回言っていることですが、絵本の翻訳は　①絵をよく見る！　②訳文を音読してみる！　最終的には、この二つに尽きると言ってもよいかもしれません。ぜひまた皆様が挑戦してくださることを願っています。

英語部門 審査員　三辺律子